

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



「学びを教える」ということ

子ども教育学科長 古川忠則

今、私は後期から担当する、ある科目の授業内容構成に専念しています。その授業の目的は、「子どもの可能性」を主要モチーフにしなが、学生とともに学ぶということの意味について検証していくものです。敢えて象徴的に表現するなら、20世紀と同様に21世紀が「子どもの世紀」であることの検証です。即ち、20世紀初頭、スウェーデンのエレン・ケイが表わした「教育の最大の秘訣は教育せざることにあり」という思想の分析・追及です。

例えば、オランダのレンブラントという画家は「蚕は桑の葉を食べながら糸を出し、繭を作り、繭の中でさなぎになり、やがてその繭に穴をあけて食い破り、蛾になって出てきます。そして卵を生むわけです。この蚕が食い破って蛾になるときは大変です。小さく開けた穴がなかなか広がらず、蛾は全力で穴を大きくしようとするのです。全身を動かして、『早くでたいよ、苦しいよ』と叫んでいるようです。そこで筆者はハサミで繭の穴を切り出口を作ってやりました。蛾は楽に出ましたが羽は小さいまま。飛べもせず夜のうちに死にました。自分で穴をあけることで羽は大きく強くなり、体力充実するのです。」(翻訳は柴山一郎著『児童生徒に聞かせたい名言1分話』、《平成10年、学陽書房》から抜粋)という話を残してくれています。

また、授業では橋本武先生の「銀の匙(中勘助著)」の教育方法を徹底的に研究しようと考えています。皆さんご承知のとおり「銀の匙授業」とは、橋本先生が灘校を無名の学校から日本有数の進学校に押し上げられた教育方法の実践校です。その時の原点が橋本先生の「自分が中学生だったとき国語の授業で何を教わったのだろうか」という自問だったという事や、中勘助先生の著書「銀の匙」を文豪 夏目漱石先生が、日本語が美しいと激賞されたというようなことが紹介されています。美しい日本語とはどのようなものなのか、といったようなことを学生諸君と解き明かしていく過程において、教育という営みの本質の一端を感じ取りたいと考えている次第です。

本学科では、皆さんが教師・保育士になってからも悔いの無いすばらしい一生を送り、何事に対しても自分自身で解決方法を求め、何事に対しても屈しない強い自分を創造していられるよう支援したいと思っています。皆さんも、学校ではもちろん、お家の方や地域の人達と話しをして学ぶことは多いと思いますので、自分から積極的に多くの人とのコミュニケーションを図り、知恵と知識を求めていってください。

(以上)